看護学生の社会人基礎力の学年別自己評価と変化

市　川　裕 美 子・山 野 内　靖　子

要　旨

看護学生の学年別の社会人基礎力の実態と変化に関係している要因を明らかにすることを目的に，A 短期大学看護学科に在籍する 1 年生から 3 年生 239 名に対し，社会人基礎力能力評価表を用い 6 月と 1 月に調査を行った。その結果，全学年において後期の自己評価が有意に高い結果であった。社会人基礎力は，学年が進むにつれて人とのかかわりや経験が増えることから身についていくが，学習が進むほど求められることも難度を増し，自身の能力や課題解決が思うように進まないことや評価時期にも影響を受けると考えられた。今後は学習の進度や自己の肯定感が低くなる時期を見極め，社会人基礎力を意識した教育的支援が必要である。

キーワード：社会人基礎力，学年別，看護学生，自己評価

I.　はじめに

近年子どもの生育の基盤となる生活環境は著しく変化し，家庭や地域での教育力の低下や子どもの生活体験の減少，また，直接人と関わらなくても情報を得られるような生活環境などから，これまで様々な人との関係や経験を通して身についてきた「社会で活動していくために必要な力」を，培う機会が少なくなってきているといわれている。経済産業省が 2006 年から提唱している　社会人基礎力とは，「職場や社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎力」と定義され，【前に踏み出す力（アクション）】【考え抜く力（シンキング）】【チームで働く力（チームワーク）】の 3 つの能力と 12 の能力要素からなっている。企業や若者を取り巻く環境変化により，基礎学力，専門知識に加え，それらをうまく活用していくための「社会人基礎力」を意識的に育成していくことが今まで以上に重要となっている。

看護学教育のカリキュラムの中には，臨地実習（以下，実習）が必修科目として組み込まれる。その目的は，看護実践活動が展開される場においての体験を通して，これまで学んだ看護学の知識・技術・態度および倫理についての理論と実際の統合，さらに，対象者を総合的に理解し看護を実践する基礎的な能力を養うことである。箕浦と高橋は，社会人基礎力の育成は，人との交流，異質な世界との出会いや評価を体験させること，それ自体が育成そのものであると述べている（箕浦・高橋，2012）。また，市川は実習前後の社会人基礎力の自己評価の結果から，実習は多くの人との交流や体験が社会人基礎力の能力向上に関係していると述べている（市川，2015）。このように，実習中はチームの一員として学びながら，対象の患者に対し看護活動を実践することから，社会人基礎力が身についていく重要な機会ともなっている。さらに，チーム医療の推進は，医療の高度化・個人の医療への意識の高まりやニーズなど様々なことに対応していくために重要である。看護師はチームの中でも一番患者の身近にいる存在として中

八戸学院大学健康医療学部看護学科

心的な役割をとることが期待され，社会人基礎力を身につけることが必要になってくる。

今回，経済産業省から提示され，岐阜大学医学部看護学科が一部改変した能力評価表を参考に作成した評価用紙を用い，A 短期大学看護学科の 1 年生から 3 年生の学習進度のそれぞれ異なる学生を対象に，年 2 回自己評価を行った。その結果から，社会人基礎力はどのように変化しているか，また変化に関係している要因は何かを明らかすることを目的に調査を行った。この調査により現状を把握することは，今後の看護学生の社会人基礎力を育てるための教育的支援の一助となる。

II. 研 究 目 的

看護学生の学年別の社会人基礎力の実態を明らかにし，変化に関係している要因を明らかにする。

III. 用語の定義

1. 社会人基礎力は経済産業省の定義である「職場や社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎力」とする。

IV. 研 究 方 法

1. 調査方法

調査時期は 2015 年度の前期 6 月と後期 1 月であった。調査対象は，A 短期大学看護学科に在籍する 1 年生から 3 年生 239 名であった。調査内容は，経済産業省から提示されている 3 つの能力，12 の能力要素のほかに，岐阜大学医学部看護学科が倫理性を加え一部改変した社会人基礎力能力評価表を参考に，4 つの能力と 13 の能力要素で作成した評価用紙を用いた。

4 つの【能力】と 13 の〔能力要素〕は，①【前に踏み出す力（以下，アクション）】〔主体性，働きかけ力，実行力〕，②【考え抜く力（以下，シンキング）】〔課題発見力，計画力，創造力〕，③【チームで働く力（以下，チームワーク）】〔発信力，傾聴力，柔軟性，状況把握力，規律性，ストレスコントロール力〕，④【倫理】〔倫理性〕に対する学生の自己評価である。

評価用紙の配布は，当該学生が集まる講義室で，口頭による説明を行い配布した。回収は留置式回収箱への個別投函とした。評価は 4：よくできる，3：少しできる，2：あまりできない，1：できないとした。

調査時期の学生の学習と実習進度を表に示した（表 1）。

2. 分析方法

統計ソフト SPSS23.0 で，学生個々の前期と後期の合計および平均を算出し，前期と後期の全学年平均の関連は，Wilcoxon の符号付き順位検定を用いた。また，学年を 1 年生，2 年生，3 年生の 3 群として，13 要素の前期と後期の関連は Kruskal-Wallis 検定を用いた。有意水準は 5% とした。

3. 倫理的配慮

八戸学院大学研究倫理委員会の承認を得た。学生には研究の目的，意義，方法，研究参加の自由意志の尊重と不参加でも不利益のないこと，データは目的以外には使用しないこと，データは統計的に処理し，集団の結果とするため個人が特定されないこと，管理は鍵付きのロッ

表 1　調査時期の学生の学習と実習進度

	前期（6 月）	後期（1 月）
1 年生	入学後 3 か月目 リベラルアーツ 日常生活援助論	入学後 10 か月目 8 月基礎看護実習 5 日 リベラルアーツ 回復促進援助論
2 年生	専門科目講義	11 月高齢者看護実習（施設実習 10 日，病院実習 10 日）
3 年生	専門実習 5 月から開始	専門実習 10 月～ 11 月初旬まで

カーで 5 年間保管することなどについて口頭で説明し，回収は留置式回収箱への個別投函とした。回答をもって研究への同意を得たとみなした。

V. 結　　果

1. 質問紙の配布と回収

質問紙の配布は，前・後期ともに 239 名であり，前期回収は 232 名（回収率 97.1%），後期回収は 208 名（回収率 87.0%）であった。

2. 学年毎前期・後期自己評価合計得点の平均

学年毎の自己評価合計得点の平均点は，すべての学年において後期の合計点が上昇していた。1 年生が 3.6 点と最も上昇し，2･3 年生は 1.8 点の上昇であったが，2 年生の平均が低い傾向にあった（図 1）。また，能力毎の平均では得点の高い方から，【チームワーク】【アクション】【シンキング】であった（表 2）。

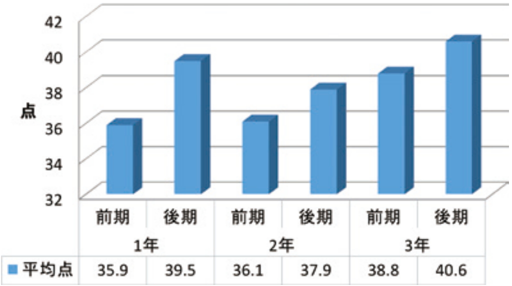

図 1　社会人基礎力自己評価合計得点の平均

表 2　3 つの能力の前期と後期の平均

能力	前期（$n=232$）	後期（$n=208$）
	M ± SD	M ± SD
アクション	2.70 ± 0.49	2.85 ± 0.43
シンキング	2.60 + 0.48	2.80 ± 0.43
チームワーク	3.04 ± 0.42	3.23 ± 0.39

3. 学年毎前期・後期社会人基礎力 13 要素の平均

全学年の 13 の能力要素毎の平均は 2.4 ～ 3.6 点であり，あまりできないから少しできるのレベルであった。〔傾聴力〕〔柔軟性〕〔状況把握力〕

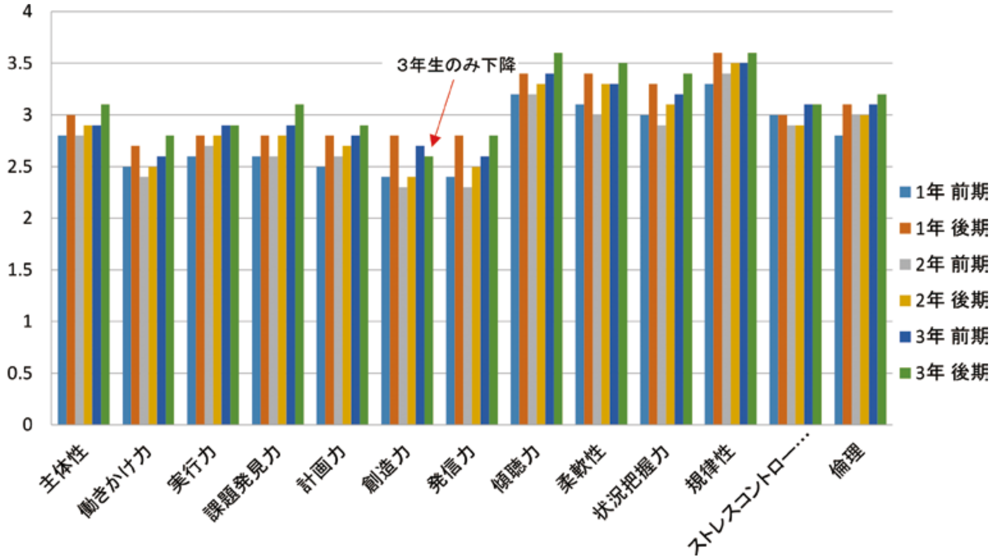

図 2　社会人基礎力 13 要素の変化

〔規律性〕は概ね全学年，前期・後期ともに3.0点以上であったが,〔働きかけ力〕〔創造力〕〔発信力〕が2.3～2.8点と低い得点であった。前期と後期では3年生の創造力が0.1点の低下であったが，その他の要素ではいずれの学年においても0～0.4点の上昇であった（図2）。

4.　全学年および学年毎の社会人基礎力の前期と後期の関連

全学年の社会人基礎力の前期と後期の関連は, Wilcoxonの符号付き順位検定を用いた結果,後期が有意に高かった（中央値＝39.00, p＝0.000）（表3）。

次に学年毎の前期と後期との関連は, Kruskal-Wallis検定を用いた。前期と後期で有意差のある能力は,【シンキング】と【チームワーク】であった。有意差のある能力要素は，前期では〔実行力〕〔課題発見力〕〔計画力〕〔創造力〕〔発信力〕〔柔軟性〕〔状況把握力〕〔倫理性〕であった。後期では〔働きかけ力〕〔課題発見力〕〔創造力〕〔発信力〕〔状況把握力〕〕であった。これらの能力要素は3年生＞2年生＞1年生の順, または3年生＞1年生＞2年生の順であり,〔課題発見力〕〔創造力〕〔発信力〕〔柔軟性〕〔状況把握力〕は1年生が2年生より高い結果であった。また，後期の〔創造力〕では1年生＞

表3　全学生の前期・後期の社会人基礎力の関連

	M±SD	最小値	最大値	中央値	z 値	p
前期（n＝232）	37.06±4.97	20	50	37.00	−7.28	0.000***
後期（n＝206）	39.39±4.31	22	49	39.00		

Wilcoxonの符号付き順位検定　zは負の順位に基づく　$^{***}p<0.001$

表4　13要素の前期・後期の関連

		前期					後期				
		1年生	2年生	3年生	p	学年比較	1年生	2年生	3年生	p	学年比較
アクション		107.2	109.9	130.0	.051		103.8	92.9	116.0	.069	
	主体性	110.4	116.1	122.4	.409		103.6	99.3	110.3	.384	
	働きかけ力	112.9	107.3	126.7	.120		105.3	91.0	116.1	.024*	3＞1＞2
	実行力	104.8	114.2	129.0	.030*	3＞2＞1	101.7	98.7	112.9	.181	
シンキング		100.9	102.6	141.3	.000***	3＞2＞1	110.7	83.9	119.4	.002**	3＞1＞2
	課題発見力	105.3	104.8	135.6	.001**	3＞1＞2	96.8	97.4	119.5	.005**	3＞2＞1
	計画力	104.7	111.0	131.5	.010*	3＞2＞1	106.1	93.3	113.2	.071	
	創造力	107.8	103.6	134.2	.002**	3＞1＞2	122.7	83.3	104.3	.000***	1＞3＞2
チームワーク		106.3	104.3	135.0	.005**	3＞1＞2	105.0	84.3	119.4	.003**	3＞1＞2
	発信力	109.8	106.0	130.6	.019*	3＞1＞2	109.9	86.7	113.4	.006**	3＞1＞2
	傾聴力	109.5	111.7	126.6	.134		100.1	95.5	116.0	.063	
	柔軟性	110.3	105.4	130.5	.015*	3＞1＞2	105.7	93.9	113.0	.108	
	状況把握力	112.0	105.3	129.0	.036*	3＞1＞2	103.2	89.0	120.3	.002**	3＞1＞2
	規律性	109.7	114.9	124.0	.293		108.0	98.7	106.0	.540	
	ストレスコントロール力	112.5	109.9	125.2	.262		106.0	94.6	112.0	.174	
倫理	倫理性	102.1	117.2	129.2	.007**	3＞2＞1	104.8	96.4	111.7	.175	

Kruskal Wallis検定　$^{*}p<0.05$　$^{**}p<0.01$　$^{***}p<0.001$

3年生＞2年生で，1年生が有意に高い結果であった（表4）。

VI. 考　　察

1. 前期と後期でみた自己評価の結果から

今回の結果では，全学年において後期の自己評価が有意に高い結果であった。後期では，それぞれ学習が進み，ゼミナール活動や演習などのそれまでの人とのかかわりや，実習という経験が社会人基礎力の能力の向上を実感させた結果ではないかと考えられる。社会人基礎力は，人間性や基本的な生活習慣を土台にした上で，基礎学力や専門知識と一体となった能力であるとされ，学生個々に様々な体験や経験から自然に身についたと考えられる。

2. 能力要素別にみた自己評価の結果から

13の能力要素毎では，チームワークの能力である〔傾聴力〕〔柔軟性〕〔状況把握力〕〔規律性〕が高かった。看護師にとって必要であるチームで働く力は，これまでの教育，入学後の学習や演習・実習などにより基礎的能力として身についたと考えられる。しかし，他人に働きかけ巻き込む力〔働きかけ力〕，新しい価値を生み出す力〔創造力〕，自分の意見をわかりやすく伝える〔発信力〕が低い得点であった。前田らが，社会人の看護学生を対象に行った調査で同様な結果を述べており，社会人の看護学生の〔計画力〕〔発信力〕〔働きかけ力〕の得点が低いことについて，社会人は，なじむこと＝あまり目立たないことを心がけていることが多い，としている（前田ら，2017）。今回の研究では，社会人入学の学生との比較は行っていないが，近年の生活環境の変化から，あまり人と直接かかわらなくても情報が得られることなどが影響し，なじむこと＝あまり目立たないことは，社会人入学の学生だけではないと考えられる。

今後は，講義，ゼミナール活動，演習や実習の中で，人に働きかけて協力を得てグループで進めていく課題などを意識的に提示し，自分たちの意見を発信する機会や場，考え創り上げていく過程を経験できるような機会を設けていくことが必要だと考える。

3. 学年別にみた自己評価の結果から

今回の結果では，能力要素の〔創造力〕を除いて3年生の得点が最も高かった。3年生は約6か月間の中で延べ16週間を，実習という大学内とは違う社会・組織のチームの一員として学びながら対象の患者に対し看護援助を実践することから，人とのかかわりも必然的に多くなり，実習経験の繰り返しにより社会人基礎力が培われ，自分自身の理解や将来に向けた確かな目標などが自信につながったと考えられる。

藪田らが3年課程看護学校の1～3年生を対象に行った結果では，どの学年でも【チームワーク】の得点が高く，【シンキング】が低かったとし，特に2年生では，【シンキング】の中の〔課題発見力〕〔計画力〕が他学年より低かったとしている。基礎看護学実習IIを控え看護過程演習などに取り組んでいる時期であり，課題解決が思うように進まず，自分の能力不足をより強く自覚したことがその理由と述べている（藪田ら，2017）。社会人基礎力は，学年が進むにつれて人とのかかわりや経験が増えることから身についていくことは容易に推察できるが，今回の結果で，特に2年生が1年生より有意に低かった要素については，藪田らが述べているように評価時期にも影響はされるが，学習が進むほど求められることも難度を増し，自身の能力や課題解決が思うように行かず自己評価が低くなることなどが影響していると考えられる。後期に評価した〔創造力〕は，1年生が3・2年生より有意に高い結果であり，3・2年生は学習が進んではいるが，現実的には新しい価値を生み出したり，応用したりすることに困難感を感じていたと考えられる。学習の進度や，自己の肯定感が低くなる時期を見極めた教育的支援

が必要であることが示唆された。

VII. 結　　論

1. 社会人基礎力は，全学年において後期の自己評価が上昇していた。

2. 13 の能力要素では,〔傾聴力〕〔柔軟性〕〔状況把握力〕〔規律性〕は概ね全学年，前期・後期ともに 3.0 点以上であったが,〔働きかけ力〕〔創造力〕〔発信力〕が 2.3 ～ 2.8 点と低い得点であった。

3. 前期と後期で有意差のある能力要素は，13 要素中の〔実行力〕〔課題発見力〕〔計画力〕〔創造力〕〔発信力〕〔柔軟性〕〔状況把握力〕〔倫理性〕の 8 要素であった。

4. 社会人基礎力は，学年が進むにつれて人とのかかわりや経験が増えることから身についていくが，学習が進むほど求められることも難度を増し，自身の能力や課題解決が思うように進まないことや評価時期にも影響を受ける。

5. 今後は，学習の進度や自己の肯定感が低くなる時期を見極め，社会人基礎力を意識した教育的支援が必要である。

謝　　辞

本研究に協力していただいた看護学生ならびに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

利益相反：本研究における利益相反は存在しない。

著者資格：YI は研究の着想から原稿作成プロセス全体に貢献，SY は原稿への示唆および全体への助言。両著者共に最終原稿を読み，承認した。

引用参考文献

1. 箕浦とき子，高橋恵.『看護職としての社会人基礎力の育て方』日本看護協会出版会, 2012.
2. 市川裕美子.「看護学生の実習前後における社会人基礎力の自己評価」『八戸学院短期大学研究紀要』41. 39-49. 2015.
3. 「社会人基礎力」経済産業省，http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/（2017 年 10 月 30 日現在).
4. 前田洋子他.「社会人学生の臨地実習に関する社会人基礎力の調査」『愛知県立総合看護専門学校紀要』11. 1-11. 2017.
5. 薮田素子他.「看護基礎教育における社会人基礎力の学年別実態」『医療の広場』57. 5. 24-29. 2017.
6. 高橋恵他.「社会人基礎力の育成」『看護展望』6. 4-46. 2013.
7. 「シリーズ教育改革 ing 社会人基礎力」『Guideline』34-42. 2010. 42 http://www.keinet.ne.jp/gl/10/04/kaikaku_1004.pdf（2017.10.2 現在).
8. 北島洋子他.「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」『大阪府立大学看護学部紀要』17-1. 13-23. 2011.
9. 吉田悟.「高等教育における感情教育の重要性」『REBT 研究』1-1. 11-27.
10. 「社会人基礎力育成の手引き―日本の将来を託す若者を育てるために教育の実践現場から―」河合塾，http://www.wakuwaku-catch.com（2015 年 2 月 17 日現在).